



ロードレースは人生そのもの
世界を舞台に活躍したい

愛三工業レーシングチーム
草場 啓吾さん

10月24日に開催された第89回全日本自転車競技選手権大会ロードレースに出場し、チャンピオンに輝いた愛三工業レーシングチームの草場啓吾さん(25歳)。「今回の優勝はチームの力で勝ち取ったもので、一人でも欠けたら成し得ませんでした。若手中心でチームが編成されてから大きなタイトルを獲得できていなかったのですが、優勝できて一安心しました」と大会を振り返ります。ロードレースは個人ではなく、チームで戦うスポーツ。優勝を狙うエースと、そのエースを支えるアシストで構成されます。「エースの前を走って風よけとなったり、他のチームのペーシングを崩したりするなど、アシストの役割は重要です。今回の大会では私がエースとして、勝ちにこだわるレース展開にできませんでした。その展開をつくってくれたのは、まさにアシストしてくれたチームメイトのおかげです」と話します。

ロードレースで日本チャンピオンになった草場さんですが、小学生の頃の夢は、水泳で五輪に出場すること。夢をつかむため、厳しい練習に打ち込んでいたとき、突如悲劇が訪れます。「小学6年生の頃、肩を故障してしまいました。そこから思うように記録が伸びず、心が折れました」と失意のどん底に。水泳は無理だと諦めかけていたところに、草場さんの活躍を見ていた知り合いから「辞めるのはもったいない。トライアスロンに挑戦してみても」と声が掛かります。その言葉を契機に、トライアスロンを始めた草場さんは、1年も経たないうちに、中学1年生の時に行われた全国大会で3位に入賞します。「水泳では大きな大会に出場できませんでしたが、初めて全国大会に出場し、入賞できて、本当にうれしかったです。3種目の中でダントツにバイクが楽しく、景色も変わりながら進んでいける爽快感が気持ち良くて、とりこになりました」と大会終了後からロードレース一本に打ち込みます。その後、地元を離れ、京都の高校、東京の大学へとロードレースの強豪校に進み、本格的に技術を学んできた草場さん。卒業後の進路について「地元愛知に帰って、地元の方々に還元していきたい」と愛三工業レーシングチームへの加入を志願します。

▲優勝をチームメイトと喜ぶ草場さん(写真左)



若者の力で大府駅前に輝きが生まれました。今号の表紙は、大府駅東側イルミネーション。若者駅前プロジェクト実行委員会がデザインの検討から設置までを手掛けました。点灯開始日の11月27日には、実行委員会のメンバー17人が大集合。点灯を見届けたメンバーは皆、安堵の表情を浮かべ、達成感に包まれているようでした。



▲大府駅西側